

## 言語景観に関する社会言語学的基礎研究

彭 国躍／尹 亭仁

近年、言語景観はことばと社会の関係を示すバロメータとして広く注目され、それに関する研究調査も言語接触、言語威信、言語政策、民族紛争と移民問題など多くの関連分野とのかかわりにおいて新しい展開を見せながら、さまざまな問題や課題を提起している。本共同研究は東アジアを中心に言語景観に関する社会言語学的基礎研究を行うものである。2015年度の研究活動について以下のように報告する。

尹は研究データ整備の一環としてソウルに2度調査に出かけた。調査の結果は「ソウルの言語景観—英語・日本語・中国語の表記を中心に」（『人文研究』No.187 神奈川大学人文学会 2015）に論文としてまとめた。ソウルの街中の景観から中国語が勢いを増している様子を取り上げた。また、言語景観を外国語教育に生かせる可能性についても論じた。2016年1月には上海の言語景観の調査に出かけるため、回る場所、インフォーマントの依頼、チェック項目など、下準備をしている。本研究をより体系的・実践的に進めるため、「日本企業の海外進出と日本文化の発信—アジア11都市における言語・色彩景観への影響」という研究課題名で2016年度科学研究費を申請している。

彭は今年度の研究成果として言語景観の通時的考察を行った論文（中国語）「上海南京路上語言景観的百

年変遷—歴史社会言語学個案研究」を完成させた。同論文は2015年12月刊行の中国の社会言語学会誌『中国社会言語学』（第23期）に掲載された。現在資料調査を終え、論文執筆中の研究テーマは「上海の都市形成期における言語景観—歴史社会言語学の事例研究」である。この論文は主に百年前頃の上海の言語景観に関する共時的研究で、2016年度に日本国内の言語学関連の学会誌に投稿する予定である。さらにいまは来年度後期の研究テーマ「革命がもたらす都市言語景観の変化—20世紀中頃の上海を事例に」と「横浜中華街の言語景観に関する社会言語学的考察」のための資料収集とパイロット調査も着々と進めている。



〔写真は彭により収集された1900年頃の上海南京路の言語景観映像45枚中の2枚である。いずれも撮影者不明。〕